

描写の哲学における二面性概念の再検討

今井 慧 (東京大学)

私たちの日常生活において、画像はきわめて重要な働きを持っている。大抵の SNS は文章だけでなく画像も投稿できるようになっている。朝、通勤・通学する際には駅のピクトグラム等に導かれながら電車に乗り、イラスト満載の広告を浴びながら目的地へ向かったりする。もちろん、マンガやアニメ、映画など、画像の鑑賞を楽しみとする人々も多くいることは言うまでもない。このような普段の生活における画像の存在感に反し、画像が画像であるとはどういうことかを巡る哲学的研究は、他のメディア、例えば言語を巡る研究（言語哲学など）と比べるとまだまだ研究途上にあると言える。

現在、画像／描写という現象についてもっともまとまった知見を持っていると言えるのは、分析美学における描写の哲学と呼ばれる分野であろう。美術史家であるエルンスト・ゴンブリッチの著作『芸術と幻影』や、美学者リチャード・ウォルハイムの『芸術とその対象』、ネルソン・グッドマンの『芸術と言語』などにおける描写に関する断片的な分析から始まったこの分野は、ある平面上の色の散らばりに過ぎない画像が、にもかかわらず自身とは別のものを指し示すようになるのはどうしてかという問いを扱ってきた。

この分野で一つの暫定的な合意となってきたのは、ウォルハイムが『芸術とその対象』の補足論文において提示した「二面性 twofoldness」の概念である。この二面性とは、私たちが画像の視覚経験を持つとき、私たちは二次元平面としての絵画表面にも、画像が描いている対象にも、視覚的に気づいているということを意味する。多くの論者がこの二面性の枠組みに基づいて描写の定義を論じてきた一方で、この二面性が必ずしも適切な分析ではないとする論者もいる。例えばジェラルド・レヴィンソンは、私たちは日常の知覚では画像表面に注意を払っていないことの方が多いと指摘する。逆にベンス・ナナイのように、画像表面についての気づきは認めながらも、私たちが画像の中に見るのは、まず第一には画像がエンコードする三次元対象であり、描かれた対象そのものではないとする論者もいる。ナナイは、ウォルハイムが単に「描写対象」として扱うものをさらに二つに分割するため、画像は三面的なものであると主張している。

本発表では、二面性に代えて三面性を主張するナナイの議論に基づき、この枠組み変更が、現在の描写の哲学における諸立場の評価にどのような影響を与えるかを検討する。